

学生の自主的研究活動の意義について —音楽指導者としての歩みから—

安 田 淳 子

A Music Teacher's Perspective on the Implications of Using Independent Study Activities

Junko YASUDA

筆者は、駒沢女子短期大学研究紀要第46号において、本学の伝統的特色の一つであった学生の自主的研究である「特定研究」について、歴史的経緯を踏まえ関係資料の提供を通して、小論「「特定研究」復活への提言」をまとめた。

本論では、筆者を指導教員として選んだ学生たちの研究内容や、学生の学びと育ちについて考察を行い、学生の自主的研究活動の意義について述べる。

キーワード：学生の自主的研究活動、教員と学生の大学らしい交流

I はじめに

本学における「特定研究」は、短大開学以来、建学の精神を基盤とした本学教育の特色の一つとして、伝統を築いてきた学生の自主的研究活動である。

小川弘貫初代学長により、前身校時代の保育内容を主とした「保育研究」を発展的に継承し、規定のカリキュラム以外に、大学生活の卒業論文のかわりに、大学教育の証として「特定研究」が位置付けられた。

特定研究では、学生が、個々の興味や関心を問題意識にまで深め、それを追求する研究の方法を学び、学問研究の基本姿勢を知る機会を持つことになる。この活動は、研究を持続し成果をあげ得たことにより専門知識や技術が深められ、それが自己への自信となり、次なる挑戦意欲に繋がる。また、このことにより学生相互や教員との人間的なふれあいから得るものも大きく、信頼関係が強まり、質の高い友情が育まれる。これらが特定研究の意義である。

特定研究という、伝統的な誇るべき学生の自主的研究活動の機会が途絶えたままの現状に、残念な思いを抱いているのは筆者だけであろうか。

筆者は、その多くを音楽分野の指導者として携わ

り、大学教員として成長する機会を与えられた。その経験から、本稿において、指導教員として筆者を選び集まった学生たちの研究内容や、そこでの学びと育ちについて振り返り、学生の自主的研究活動の意義について考察し、そのことを通じて特定研究復活への再考としたい。

方法は、共に研究した指導学生の研究発表（全論題）の紹介を通して、出会った全ての学生に敬意と感謝をもって、特定研究を振り返ることとする。

II 保育科教員としての歩み

筆者は、駒沢女子短期大学保育科創設4年目の昭和43年から「器楽（ピアノ）」の担当教員として本学教育に携わってきた。

当初は、90分授業内で10数名の学生の個人レッスンを行うことのプレッシャーと時間配分への腐心に明け暮れ、無我夢中の日々であった。そして、初めて迎えた学期末ピアノ試験では、クラス毎に一堂に会した先輩の先生方の指導学生の演奏とは明らかに違う、指導者自身の未熟さを露呈する結果に、実力の欠如を思い知らされた。指導者としての責任を痛感するとともに、学生に申し訳ないという思いから、

勉強のやり直しを真剣に考える日々の始まりでもあった。

保育科ピアノ指導者としての自覚と覚悟のもと、自身のピアノの実力向上のために、学内外での演奏の機会や、研究会への参加、公開レッスンの受講や参観などを通して、レパトリーの拡大や教授法の研究に取り組んだ。自身の課題が明確になり進むべき方向性が見え初めてからは、学生一人ひとりへの対応にも余裕が生まれ、学生指導の成果に結びつくようになって行った。

それは、当時のピアノの授業は2年間必修（平成7年度まで）であったことに負うところが大きかったと思われる。

1回毎のレッスン時間に追われて一喜一憂せずに、長いスパンで学生を育て、その成長を待つ余裕があった。その連続性から、学生は長期休み期間の活用が可能であり、1年次から2年次への春休みの期間に課題に取り組むことにより、2年次の授業が円滑に進められた。また、当時の学期制では9月に前期試験が行われていたため、ピアノの必要性を重く受け止め実力養成を目指す学生にとっては、夏休み期間は貴重な時間と、学修成果をもたらしていた。

この時代の学生にとっての教育的環境は、施設・設備に関しては恵まれたものとは言いがたいが、教員と学生の相互に、何事にも熟成を待つ精神的なゆとりがあった点では、恵まれていたといえる。

生涯の師との出会い

さて、筆者が保育科教員として、今日まで歩んでこられたのは、スタートの時期に「学生という鏡」に気づかされ、そこに映し出される自身の姿に出会ったことが大きかったが、さらに、自己に向き合い進むべき方向性を探し求めていた時期に、生涯の師と出会えたことが大きいといえる。

「ピアノは技術で弾くものではない。技術以前に音楽する態度が大事である。音楽の心を心とし、音そのものの一つひとつの心をつかむこと。自分の音を良く聴き、命ある音を出すこと。常に音楽を感じて演奏すること」という師の教えにより、ピアノ演奏や音楽表現への目覚めと成長への確かな手ごたえを感じるきっかけを与えられた。その師のもとで研鑽をつむことになったことが幸運であった。

その結果、数々の演奏会で、ピアノ独奏やピアノ

二重奏、声楽家やフルート、ヴァイオリン奏者の伴奏ピアニストとして協演などの経験を積むことが出来た。また、恩師のピアノや声楽などのレッスン、合唱指導などを間近にし、音楽以外にも指導者としての人間性を学ぶ機会を得た。

この経験が、保育科教員として、また特定研究の音楽指導者としての財産となったことは、間違いのないといえる。それだけに、特定研究の復活が望まれるのである。

Ⅲ 「特定研究」指導者としての歩み

昭和41年度の第1回特定研究発表会以来、平成12年度までの特定研究（13年度からは保育総合ゼミとして継承）の歴史、あり方や内容は学園の歩みの大きな流れと無縁ではない。また、筆者自身の指導者としての歩みにも密接な関わりをもっているといえる。

ここでは、筆者自身の特定研究とのかかわり方を、大きく4つの節目ごとにまとめ、指導学生の研究発表（全論題）を中心に、考察を行うこととする。

第1期（昭和41年度～昭和48年度）

小川弘貫学長時代で、研究分野は保育研究に関する論文作成、論述発表であった。この時期の筆者は、第3回発表会から聴衆として、また、特定研究委員の一人としてかかわった時期である。

担当するピアノの授業において、自身の実力アップや経験とともに学生指導に余裕が生まれ、学生の成長する姿に接するにつれて、授業内の時間的な制約の中では、じっくりと作品を仕上げる事が出来ない物足りなさを感じるようになった。また、特定研究に関しては、指導者として学生と直接かかわる機会がなく、駒沢の保育科教員として、欠落感や疎外感を抱き始めていた。

そのような時期に、特定研究を継続する上での検討が始まり、多様化する学生にとってのよりよい方策として、音楽や児童文化関係などでの実技発表や造形での作品製作など、研究分野の拡大が意見として出され、そして実現化に向けて準備が始められた。

第2期（昭和49年度～昭和54年度）

学園にとって、昭和49年度は衝撃的な幕開けであった。象徴的存在であった小川弘貫学長が入学式の壇上で突然遷化され、学監であった上田祖峯先生

が学長に就任（平成6年度まで、その後は東隆真学長）された。特定研究については、本学の伝統的特色の一つとして、その教育的使命を継承されている。

特定研究は、その49年度に新たな時を迎えた。懸案であった研究分野の実技系分野への拡大化が実現し、音楽部門での演奏発表も加わったのである。

初年度の音楽での参加者は、7論題（合奏3、独唱および重唱1、ピアノ連弾2、ピアノ独奏1）、30名であったが、筆者も2名の指導者の一人として、ピアノ独奏、連弾のそれぞれ1発表を担当した。

音楽部門の発表会場となった大講堂は、当日は成道会の式典が挙行されたが、普段は朝礼・正念、体育や音楽リズム等の授業の場でもあり、板敷きである。そのため、前日には椅子席をセッティングして発表会場として設営する作業が必要であり、また、発表会終了直後には片付け原状回復作業を行うことになる。多くの人数、時間が必要であり、学生運営委員を初めとして教職員、発表者を含めた学生全員で取り組むことになる。この作業は、学生にとっても決して楽なものではないが、保育現場での行事準備等に通じるものであり、ここでの経験もまた貴重なものであったといえるであろう。手作り感のある発表会であった。このような点にも、特定研究の教育的効果が窺われるのではないだろうか。

この音楽部門の初めて発表会は、勇気を持って参加した2年生の思いが通じ、驚きと感動で1年生の心を動かし次年度の発表会へと繋がっていった。

翌50年度の参加者は大幅に増加し、非常勤1名を含めた5名の指導教員のもとで、57名の学生が21論題（器楽合奏8、ピアノ独奏8、独唱5）の発表を行い、その後の音楽部門発展への道標として定着していった。しかし、当時は、発表要旨の冊子は休止中であつたため、論題一覧表（発表会プログラム）によってでしか、全容を把握できないのは残念なことである。

さて、この時期に筆者のもとで研鑽を積んだ学生の研究発表は以下の通りである。出会った全ての学生への敬意と感謝の気持ちをこめて、ここに発表会のプログラムを紹介させていただくこととする。

昭和49年度 49. 12. 7（土）

- ・ピアノ独奏
ソナタ 第9番ホ長調 作品14 No.1 ベートーヴェン

第1楽章

- ・ピアノ連弾
春の小川 中田喜直編曲
4手のためのソナタニ長調 k.381 モーツァルト

昭和50年度 50. 12. 16（火）

- ・ピアノ独奏
愉快な鍛冶屋 ヘンデル
- ・ピアノ独奏
ロンド ハ長調 作品51 No.1 ベートーヴェン
- ・ピアノ独奏
即興曲 変ロ長調 作品142 No.3 シューベルト
- ・ピアノ独奏
かっこう ダカン

昭和51年度 51. 12. 8（水）

- ・ピアノ独奏
ソナタ 第23番 ヘ短調 作品57 ベートーヴェン
＜熱情＞ 第1楽章
- ・ピアノ独奏
デュポールのメヌエットによる 九つの変奏曲
ニ長調 k.573 モーツァルト
- ・ピアノ独奏
無言歌第1巻 作品38 メンデルスゾーン
第3番 狩の歌
- ・ピアノ独奏
ピアノのために ドビュッシー
第1曲 プレリユード

昭和52年度 52. 12. 8（木）

- ・ピアノ連弾
クシコスポスト ネット
汽車は走るよ 中田喜直
- ・ピアノ連弾
お江戸日本橋 高木東六編
めだかの学校 中田喜直・編
- ・ピアノ独奏
幻想曲 ニ短調 k.397 モーツァルト
- ・ピアノ独奏
ワルツ 変イ長調 作品64 No.3 ショパン
- ・ピアノ独奏
ベルガマスク組曲 ドビュッシー
第1曲 プレリユード

昭和53年度 53. 12. 8 (金)

- ・ピアノ独奏
ソナタ ヘ長調 k.332 モーツァルト
第1楽章
- ・ピアノ独奏
ソナタ イ長調 k.331 モーツァルト
第3楽章 トルコ行進曲
- ・ピアノ独奏
ワルツ ロ短調 作品69 No.2 ショパン
- ・ピアノ独奏
幻想曲「さくらさくら」 平井康三郎

昭和54年度 54. 12. 8 (土)

- ・ピアノ独奏
二つのラプソディー ブラームス
第1番 ロ短調 作品79 No.1
- ・ピアノ独奏
夕暮の鐘 変ホ長調 作品85 サン＝サーンス
バガニーニによる大練習曲 リスト
第3番 嬰ト短調 ラ・カンパネラ
- ・ピアノ独奏
愛の夢 (三つの夜想曲) リスト
第3番 変イ長調
- ・ピアノ独奏
スケルツォ 第2番 変ロ短調 作品31 ショパン

この時期での演奏発表は、ピアノ独奏 (20論題) とピアノ連弾 (3論題) に限られていた。独奏では、ピアノ上級者がモーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、ショパン、リスト、ドビュッシーなどの大作曲家の芸術作品に挑戦するケースが多く見られる。取り組んだ作品は、主に指導者自身が演奏を行った、レッスンを聞かせるなどの経験をした曲が中心であった。その点で学生指導を通して筆者自身、音楽演奏法の研究に新たな課題を見出すこととなった。

ところで、54年度は参加者が極端に落ち込んでしまい、特定研究の存続上最大の危機の年であった。この事態に、特定研究委員を中心に全教員が一丸となり、検討を重ね対策に取り組んだ。具体的には、教員各自の研究分野の見直しを行い、学生の興味関心にあった内容を提示する。特定研究の意義と成果について、特定研究を経験した学生の具体的な事例

や感想等を伝え啓蒙する。ただし、あくまでも自主研究であり決して強制ではないとの理解を深め、希望調査の段階で研究に対するハードルを高くしないなど、先ずは学生の心を動かし背中を押すことであった。その結果、この年の参加者の研究発表が何れも素晴らしいものであったことも幸いし、翌55年には事態は劇的に改善されたのである。

第3期 (昭和55年度～昭和63年度)

昭和55年度は、2つの点で大きな節目を迎えている。1つは、論題数 (49論題)、参加者 (138名) が大幅に回復して、発表会が2日間開催 (62年度まで) に変更になったことであり、2つ目は、それまで休刊中であった「保育研究」が復活したことである。また、同時に、発表会当日の「発表要旨」の冊子 (プログラム) も充実したものとなった。

復活した「保育研究」第4号では、実技系の発表も、論述系の発表と同様に研究内容 (B5版1ページ) が掲載されている。翌年度から実技系は発表の一覧のみとなったため、学生の研究の全貌を知る上で貴重な資料となっている。

さて、「発表要旨」の冊子 (プログラム) の充実により、学生は曲目の解説や、発表者の志望理由や研究過程、発表のポイントなどを、事前に知った上で発表会に望めるようになった。それまで研究とは硬く、大変なことというイメージや自分には自信がないという恐れなどで消極的であった1年生が、主体的に発表会に出席し、次年度の自分の姿を想像しながら、特定研究を考えるきっかけとすることが出来るようになった。またそこでの出会いや感動が自身への挑戦するエネルギーになっていった。このことが、56年度からの参加者回復の要因のひとつとしてあげることが出来る (この年から実技系の発表が理論系を大幅に上回る傾向になる)。

昭和55年度 55. 12. 8 (月)・9 (火)

- ・ピアノ独奏
ソナタ 第21番 ハ長調 作品53 ベートーヴェン
＜ワルトシュタイン＞ 第一楽章
- ・ピアノ独奏
子供の領分 ドビュッシー
5. 小さな羊飼ひ
4. 雪は踊っている

6. ゴリウォークのケーキ・ウォーク
- ・ピアノ連弾

16のワルツ集 作品39 ブラームス
第1・第3・第4・第6・第15番
 - ・ピアノ連弾

組曲「ドリー」 フォーレ

 1. 子守唄
 2. 猫（にゃーお）
 3. ドリーの庭
 4. スペイン舞曲

昭和56年度 56. 12. 8（火）・9（水）

- ・童謡弾き語り

あめふりくまのこ 鶴見正夫詞 湯山昭曲
めだかのがっこう 茶木滋詞 中田喜直曲
ことりのうた 与田準一詞 芥川也寸志曲
かわいいかくれんぼ サトウハチロー詞 中田喜直曲
いぬのおまわりさん さとうよしみ詞 大中恩曲
- ・ピアノ独奏

十二月ピアノ曲集（四季） 作品37a
六月 舟歌 ト短調 チャイコフスキー
- ・ピアノ独奏

即興曲 へ短調 作品142 No.4 シューベルト
- ・ピアノ独奏

バラード 第3番 変イ長調 作品47 ショパン
- ・ピアノ連弾

組曲「子どもの遊び」 作品22 ビゼー

 6. ラッパと太鼓
 11. 小さなおくさまと小さなだんなさま
 12. 舞踏会

昭和57年度 57. 12. 8（水）・9（木）

- ・ピアノ連弾

小組曲 ドビュッシー

 - I 小舟にて
 - II 行列
- ・ピアノ連弾

小組曲 ドビュッシー

 - III メヌエット
 - IV バレエ
- ・ピアノ連弾

組曲「子供の遊び」 作品22 ビゼー

 3. お人形

4. 回転木馬
 8. すみ取り鬼ごっこ
- ・童謡弾き語り

ぞうさん まどみちお詞 團伊玖磨曲
おつかいありさん 関根栄一詞 團伊玖磨曲
もんしろ蝶々のゆうびんやさん
サトウハチロー詞 中田喜直曲
 - ・独唱

七つの子 野口雨情詞 本居長世曲
めえめえ児山羊 藤森秀夫詞 本居長世曲
赤蜻蛉 三木露風詞 山田耕筰曲
 - ・ピアノ独奏

こどものための組曲「動物園のピアノ」 服部公一

 1. コアラは優しいボーイフレンド
 4. ひとりぼっちのかもしか
 6. ぞうさんランニング
 7. お散歩たぬきと自動車
 - ・ピアノ独奏

こどものための組曲「動物園のピアノ」 服部広一

 2. くじゃくの美しいおどり
 8. ペンギンさんおつかいに
 - ・ピアノ独奏

こどものための組曲「動物園のピアノ」 服部広一

 9. パンダの子守唄
 11. 小馬のジャズ
 12. ロックン・ベア（助演2名）
 - ・ピアノ独奏

即興曲 第2番 嬰へ長調 作品36 ショパン
 - ・ピアノ独奏

コンソレーション（慰め） リスト
第3番・第6番
 - ・ピアノ独奏

二つの伝説 リスト
II 波の上を渡るパオラの聖フランシス

昭和58年度 58. 12. 8（木）・9（金）

- ・ピアノ独奏

前奏曲 第1集 ドビュッシー
第8曲 亜麻色の髪乙女
- ・ピアノ独奏

叙情小曲集 ギロック
森のざわめき・海の風景・蜂鳥
秋のスケッチ・魔女の猫

- ・ピアノ独奏
エリーゼのために ベートーヴェン
- ・ピアノ独奏
ソナチネ ト長調 作品20 No.1 ドゥセック
- ・独唱
叱られて 清水かつら詞 弘田竜太郎曲
待ちぼうけ 北原白秋詞 山田耕筈曲
- ・独唱
お菓子と娘 西条八十詞 橋本国彦曲
市の花屋（“パリの旅情”から）
深尾須磨子詞 高田三郎曲
- ・ヴァイオリン独奏
協奏曲 イ短調 第一楽章 ヴィヴァルディ
トロイメライ シューマン

昭和59年度 59. 12. 8（金）・9（土）

- ・ピアノ連弾
朝のロンド 高木東六
アンボンの舟 高木東六
- ・ピアノ連弾
汽車は走るよ 中田喜直
- ・ピアノ連弾
4手の為のソナタ ハ長調 k.521 モーツァルト
第1楽章・第3楽章

昭和60年度 60. 12. 6（金）・7（土）

- ・童謡弾き語り ―夢のうた―
子鹿のバンビ 坂口淳詞 平岡照章曲
猫になりたい 大谷和子詞 大中恩曲
きりんさんのでんわ まどみちお詞 中田喜直曲
ピアノをぞうさんが 香山美子詞 湯山昭曲
- ・ピアノ独奏
「シンデレラ」 斉藤高順
1. 優しいシンデレラ
3. かぼちゃの馬車
6. ガラスのくつ
8. 結婚行進曲
- ・ピアノ独奏
幻想曲 ハ短調 k.475 モーツァルト
- ・ピアノ独奏
練習曲 ハ短調 作品10 No.12 ショパン
＜革命＞

昭和61年度 61. 12. 5（金）・6（土）

- ・ピアノ連弾
ソナタ ニ長調 作品6 ベートーヴェン
- ・ピアノ連弾
3つの大行進曲 作品45 ベートーヴェン
第3曲 ニ長調
- ・ピアノ連弾
ピアノ連弾曲集Ⅰ 作品149 ディアベリ
第15番 ニ長調
第23番 イ長調（ポロネーズ）
第25番 イ短調
- ・ピアノ連弾
ハンガリー舞曲集 ブラームス
第16番 ヘ短調
- ・ピアノ連弾
ハンガリー舞曲集 ブラームス
第10番 ホ長調
第3番 ヘ長調
- ・ピアノ連弾
ハンガリー舞曲集 ブラームス
第1番 ト短調
第18番 ニ長調
第21番 ホ短調
- ・ピアノ独奏
夜想曲 ヘ長調 作品15 No.Ⅰ ショパン
- ・ピアノ独奏
レントよりも遅く ドビュッシー
子供の領分 ドビュッシー
第3曲 人形へのセレナード

昭和62年度 62. 12. 4（金）・5（土）

- ・合唱 （演奏者26名）
組曲「沙羅」
丹沢 清水重道詞 信時潔曲 福永陽一郎編曲
中田喜直童謡曲集
豆っこ打ち 結城ふじを詞
きんきんきんぎょ 小林純一詞
花のお国の汽車ポッポ 小林純一詞
- ・ピアノ独奏
ソナタ 第8番 ハ短調 作品13 ベートーヴェン
＜悲愴＞ 第3楽章
- ・ピアノ独奏
練習曲 ホ長調 作品10 No.3 ショパン

＜別れの曲＞

昭和63年度 63. 12. 2 (金)

・ピアノ独奏

ハンガリア狂詩曲 第2番 嬰ハ短調 リスト

・ピアノ独奏

ソナタ 第11番変ロ長調 作品22 ベートーヴェン
第1楽章

・ピアノ独奏

胡蝶 作品2 シューマン

この時期の筆者の取り組みは、ピアノ上級者が大作曲家の芸術作品に取り組むための特定研究としてだけではなく、初心者や、寮生などの自宅通学者以外でも挑戦できる、またピアノ経験者であっても本格的ステージの未経験者や、音楽は好きだけれども表現するのが苦手で自信が持てないという学生にこそ参加できる環境作りを心がけ、実践している。

内容的には、自身の演奏発表などの経験を踏まえ、研究分野をピアノ演奏に限定せず、音楽表現全般に拡げている。その結果、ピアノ独奏(25論題)、ピアノ連弾(15論題)に加え、童謡弾き語り(弾き歌い・3論題)、独唱(3論題)、合唱(1論題)、楽器演奏(ヴァイオリン独奏・1論題)、ピアノ伴奏(独唱と独奏楽器との協演・1論題)とバラエティーに富んだ研究内容の指導にかかわることになった。

また、選曲に関しては、個々の特性を見極めながらも、全体としてはテーマ性と学生間の連携、継承をめざして、組曲やこどもをテーマにした作品を多く取り上げ、同年度内または複数年度でのいくつかの発表でそれぞれが数曲を分担して作品を完成させる手法を試みている。

第4期(平成元年度～平成12年度)

平成元年度に、学園が稲城キャンパスに全面移転し、恵まれた新しい環境での教育がスタートした。特定研究発表会音楽部門の発表会も、記念講堂(会場内はゆったりとした客席数1507席を有する本格的な大ホール)において、反響版をセットしたステージで、スタインウェイフルコンサートピアノでの演奏という本格的な演奏会へと変貌したのである。

この時期での筆者の取り組みは、研究分野において、学生からの要望により新たにハンドベル演奏(7

論題)が加わり、ピアノアンサンブル(1論題)ではピアノを中心に種々の楽器を組み合わせるピアノ曲(独奏・連弾)を自分たちでアレンジして演奏するという試みがなされた。また、合唱(4論題)の参加も増加して、それまでの指導の中心であったピアノ演奏(独奏・9論題、連弾・5論題)や弾き歌い(1論題)に加え、チームワークが必要となる大人数での発表形態の指導が増えたのが特徴的である。これらの研究では、より自主的に、また愛や自然、夢、美しい日本の詞など具体的なテーマの表現を目指した取り組みが目立つようになった。

平成元年度 1. 12. 1 (金)

・ピアノ連弾

組曲「子供の遊び」作品22 ビゼー

第1曲 ぶらんこ(夢想曲)

第12曲 舞曲曲(ギャロップ)

平成2年度 2. 12. 4 (火)

・ピアノ独奏

「赤ずきん」 芥川也寸志

3. 出発

5. お花ばたけ

6. 助かったあかずきんとおばあさん

・ピアノ独奏

即興曲 変ホ長調 作品90 No.2 シューベルト

平成3年度 3. 12. 5 (木)

指導担当学生 なし

平成4年度 4. 12. 3 (木)

・ピアノ連弾

ハンガリー舞曲集 ブラームス

第5番 ト短調

・ピアノ独奏

幻想即興曲 嬰ハ短調 作品66 ショパン

平成5年度 5. 12. 2 (木)

・ハンドベル演奏

ロンドンデリーの歌 アイルランド民謡

D.アルマン編曲

グリーンスリーブス イギリス民謡

D.マッキントイア編曲

大きな古時計 H. C. ワーク作曲
M. L. トンプソン編曲
アメイジング グレイス アメリカ民謡
R. アートマン編曲
ホワイト クリスマス I. パーリン作曲
C. ドプリンスキー編曲
(演奏者7名・ハンドベル2オクターブ編成)

平成6年度 6. 12. 7 (水)

・ハンドベル演奏
FESTIVO Music by Douglas E. Wagner
AMAZING GRACE American Folk Song
Arr. by Ruth Artman
ALADDIN <Prince Ali-Friend Like Me-A Whole
New World> Music by Alan Menken
Arr. by Douglas E. Wagner
(演奏者10名・ハンドベル3オクターブ、
クワイアチャイム2オクターブ編成)

・ピアノ連弾
5つのやさしいピアノ曲集 ストラヴィンスキー
I アンダンテ
Ⅲ バラライカ
V ギャロップ
・ピアノ独奏
ソナタ 第9番 ホ長調 作品14 No.1
第1楽章・第3楽章 ベートーヴェン

平成7年度 7. 12. 7 (木)

・ハンドベル演奏
ALADDIN <Prince Ali-Friend Like Me-A Whole
New World> Music by Alan Menken
Arr. by Douglas E. Wagner
WHITE CHRISTMAS Music by Irving Berlin
Arr. by Cynthia Dobrinski
(演奏者13名・ハンドベル4オクターブ、
クワイアチャイム1オクターブ編成)

平成8年度 8. 12. 5 (木)

・ハンドベル演奏
WHITE CHRISTMAS Music by Irving Berlin
Arr. by Cynthia Dobrinski
MY GRAND FATHER' S CLOCK
Music by Henry C. Work

Arr. by Martha Lynn Thompson
EDELWEISS from "The Sound of Music"
Music by Richard Rodgers
Arr. by John F. Wilson
DO - RE - MI from "The Sound of Music"
Music by Richard Rodgers
Arr. by Martha Lynn Thompson
(演奏者7名・ハンドベル4オクターブ編成)

・合唱 —日本の美しい歌— (演奏者12名)
花 武島羽衣詞 滝廉太郎曲
浜辺の歌 林古溪詞 成田為三曲
赤蜻蛉 三木露風詞 山田耕筈曲
落葉松 野上彰詞 小林秀雄曲

平成9年度 9. 11. 27 (木)

・ハンドベル演奏
MICKEY MOUSE MAYCH
Music by Jimmy Dodd
MY GRAND FATHER' S CLOCK
Music by Henry C. Work
Arr. by Martha Lynn Thompson
THE BLUE DANUBE WALTZES
Music by Johann Strauss
Arr. by Fred A. Merrett
(演奏者7名・ハンドベル4オクターブ編成)

・合唱 —日本の美しい古謡— (演奏者8名)
組曲「沙羅」
丹澤 清水重道詞 信時潔曲 木下保編曲
ずいずいずっころばし わらべ歌 菊川延夫編曲
さくらさくら 古謡 三枝成章編曲

平成10年度 10. 12. 3 (木)

・ピアノ連弾
A Whole New World Alan Menken
小馬のジャズ 服部公一
汽車は走るよ 中田喜直

平成11年度 11. 12. 2 (木)

・ハンドベル演奏
JINGLE BELLS Music by James Pierpont
Arr. by Douglas E. Wagner
AMAZING GRACE American Folk Song
Arr. by Ruth Artman

WHITE CHRISTMAS Music by Irving Berlin

Arr. by Cynthia Dobrinski

(演奏者8名・ハンドベル2オクターブ編成)

・ハンドベル演奏

THE SWAN from “Carnival of the Animals”

Music by C. Saint Saëns

Trans. by Douglas E. Wagner

GRAND VALSE BRILLANTE

Music by F. Chopin

Arr. by Ruth Artman

(演奏10名・ハンドベル4オクターブ編成)

・合唱

(演奏者10名)

花

武島羽衣詞 滝廉太郎曲

女声合唱のための唱歌メドレー 源田俊一郎編曲

「ふるさとの四季」より

平成12年度 12. 12. 6 (水)

・ピアノ アンサンブル

(演奏者5名)

～ディズニー ファンタジー～

美女と野獣 他

・弾き歌い

浜辺の歌

林古溪詞 成田為三曲

からたちの花

北原白秋詞 山田耕筰曲

待ちぼうけ

北原白秋詞 山田耕筰曲

赤蜻蛉

三木露風詞 山田耕筰曲

・合唱

(演奏者14名)

大地讃頌

大木惇夫詞 佐藤真曲

あの素晴らしい愛をもう一度

北山修詞 加藤和彦曲

時の旅人

深田じゅんこ詞 橋本祥路曲

・ピアノ連弾

主よ、人の望みの喜びよ

J. S. バッハ

小林秀雄編曲

エンターティナー

S. ジョプリン

後藤丹編曲

・ピアノ連弾

ワルツ集 作品39

ブラームス

第15番 変イ長調

ハンガリー舞曲集

ブラームス

第5番 嬰へ短調

・ピアノ独奏

スケルツォ 第2番 変ロ短調 作品31 ショパン

平成5年度から、ハンドベル演奏が研究分野の一つとして加わったが、それは、次のような出会いと、経緯から生まれたものである。

平成5年の1月に実施した、次年度の特定研究希望調査で、ハンドベルを研究分野として希望、登録した学生のグループがあった。当時保育科には指導者はおろか楽器すらなかったので研究分野としては想定していなかったのであるが、高校時代にミュージックベルを経験した学生が本格的な楽器であるハンドベルでの演奏を強く望んだのである。筆者がたまたまテレビの番組で偶然見かけた大学生の演奏に感動し、ベルの魅力に触れた直後であったため、本学でもハンドベルに取り組む絶好の機会として捉え、学生の希望に添うべく態勢を整えるため、大学にハンドベルの購入を検討していただいた。

高額な楽器にもかかわらず、平成5年度に2オクターブ、平成6年度に3オクターブ目、平成7年度に4オクターブ目を、また、同時期に3オクターブのクワイアチャイムを購入して頂く幸運に恵まれた。

このことから、本学における学生の自主的研究は、学園の理解と教育的支援を得て、発展、継承されてきたことがわかる。特定研究は、平成13年度から保育総合ゼミに移行したが、ハンドベル演奏は、安田ゼミのメインテーマとして継承して行っている。

Ⅳ 学生の学びと育ち

ここまで、筆者の指導学生の発表について振り返ってきたが、特定研究に取り組む学生の姿は、人の心を動かすものである。また、特定研究は、保育科学生の幅広い分野での才能や普段とは違った一面と出会い、互いを認め合うことのできる機会でもある。

特定研究が、目指すべきこと、もたらすものには計り知れないものがあるが、発表者、1年生、指導教員、特定研究委員、他の分野の教員等の立場の違いで捉え方に微妙な違いが、また、時間の経過と共に感じ方に変化や深い考察が加わってくるものであろう。以下、その内容を流れに沿って説明する。

1. 出会いと学びの始まり

学生の研究は、出会いを通して第一歩が始まる。出会いが全てであると言っても過言ではないように思う。なぜならば、出会いとその思い入れこそが、その後の作品と向き合う研究の過程で起きる、挫折

や葛藤などの自己との戦いを乗り越えるエネルギーになるといえるからである。

その出会いとは、自身の内なる心の声であり、指導者への師事や演奏作品の選曲などである。具体的な内容は学生の声からまとめると次の通りである。

1) 自らの内なる心声を聞く（志望動機）

「2年生の発表会で感動した」「寮の先輩の研究に接して刺激を受けた」「昔からピアノが好きだった」「昔から習っていたが演奏会は初めて」「初心者だがステージで演奏したい」「仲間と一緒に演奏したい」などの声が多い。

2) 指導教員、研究分野を選択する（師事）

「ピアノの指導教員だから」「初めての先生で新しい自分に出会いたい」「入学前から、憧れの先生だったので」「研究分野に憧れて」などの理由で、指導教員を選択、師事している。

3) 研究作品（作曲家）の選曲（演奏）

「大好きな曲なので」「昔から憧れの曲なので」の理由が多いが、中には「知らない曲で自分の可能性を見つけない」「テーマにあった曲に出会いたい」などの理由も見られる。

2. 自己への挑戦

1) 1年生の時の発表会場での気づき

「これまで、自分を表現しようとする機会を自ら避け、理由もなく拒んできた一面を持つ自分を改めて垣間見る思いがした」同時に「そこには今までとは違う自分を感じた」「研究での不安があるが、新しく、何かを求め第一歩を踏み出すことにした」と、勇気を持って挑戦している。

2) 母親への感謝

それまでの自分を振り返り、「挫折ばかりを味わってきた。自分を支えてくれた、特に母に対して小さな恩返しのためで挑戦した。自分なりの力で演奏できたら、それが私の感謝の気持ちです」と、初めてのステージに挑戦した。

3. 新しい自分への出会い

演奏経験を通して、「私の中のもやもやしたもの」がなくなり、新しい何かをひきだしてくれたと思う。そして、今までとは、どこか違った私が生まれた」と、新しい自分に期待感を抱く様子が見られる。

以上、「保育研究」や「発表要旨」などに掲載されている学生自身の声から、特定研究における学生の出会いと学びについて述べてきたが、学生が自身の感動、憧れ、仲間意識、挑戦などの心の声に衝き動かされて、自らの意思で特定研究に挑戦し、その結果、新しい自分に出会う様子が窺える。

ところで、指導を通してのエピソードには事欠かない。今回の振り返りを通して一つひとつが鮮明に蘇ってくる。印象的な事例を紹介する。

エピソード1 パートナーが発表当日不在

ピアノ連弾で、演奏者の一人に当日演奏不可能な事態が起きてしまったケース：

念願であった就職試験のためであり、試験日を他日に変更することは困難であった。本人はパートナーの研究発表の機会を奪うことになる責任の重さに悩み、逡巡した。

科内で検討し、指導者である筆者がピンチヒッターを務めて発表を乗り切るといふ、教育的配慮がなされた。（この処置は今回限りとし、以後は事前指導の徹底を図ることで合意）

エピソード2 選曲の変更①

研究途中で、卒業後の進学のための受験準備と研究の板ばさみで悩んだケース：

どちらも中途半端にしたいくない、研究を放棄するのも許せないという本人の気持ちに添う方策として、芸術作品の難曲に挑戦するのではなく、技術的に負担が少なく両立が可能なレベルの曲に変更して、音楽を楽しむ心を伝えることをテーマとして曲目の完成を目指すことを提案、本人も納得して研究発表をやり遂げることが出来た。

エピソード3 選曲の変更②

本人の希望で高いレベルの曲に挑戦したが、仕上げるの時期になって、越えられない技術の未熟さに気がつき、勇気を持って研究の曲目を変更したケース：

かつて勉強した曲を現在のレベルで再挑戦し、より完成度の高い演奏を目指した。

エピソード4 持病に打ち勝つ

演奏の最中にも一瞬意識が遠のくことがあるという難しい持病を抱えたケース：

子供の頃から大好きなピアノに、高レベルの

難曲で挑戦。無事発表し終えた時の充実感と誇りに満ちた笑顔が印象的であった。

エピソード5 母娘2代で悲願達成

子育て中に資格取得のために入学した母親の思いを、娘が受け継いだケース：

母親は在学中、意欲的な学生生活を送り、研究（ピアノ独奏）にも取り組もうとしたが、家庭の事情で途中断念した。その当時小学生であった娘が母親と同じ道に進み、本学の後輩として、研究発表を行った。

エピソード6 心残りの痛み

最後まで学生の行動、精神性を理解できなかったケース：

指導者として、常に全身全霊で取り組んでいた筆者が唯一、学生との関係に苦慮し、学生の指導上の不満を解消できないまま発表会当日を迎えてしまった。今日の学生によく見られるタイプであるが、当時は不可解な行動とでしか理解が及ばず、指導者としての痛みとして今でも残っている。

エピソード7 新しい歩みの始まり

演奏経験の達成感から更なる表現活動へ飛躍したケース：

発表会の打ち上げで鑑賞した「第九」の合唱に魅せられ、卒業後保育者として勤務しながら、区主催の「第九」を歌う会に自ら所属してオーケストラとの共演を果し、その後も数年に亘って活動を続けた。

これらのエピソードを通して、特定研究が、ただ演奏の技術の習得や発表会での出来不出来という結果がすべてではない、自己と向き合い、さまざまな困難を乗り越えて研究を持続する過程が尊いことを示唆している。

特定研究に取り組んだ多くの学生は、発表会での達成感や喜びを、またその体験を通して得た感動、手ごたえを自信に変え、励みとして保育科を羽ばたいて行った。その後の人生において、特定研究の経験が活かされ、また、駒沢での学生生活の良き思い出となっていることを願って止まない。

V 終わりに

本学での教員生活において、専門科目の授業での学生との出会いと育成の日々と共に、学生の自由意

志の求めに応じて師弟関係が始まり、研究活動に取り組んだ「特定研究」は、学生との大学らしい交流の場として一番の思い出である。実技系分野として音楽演奏での研究発表がスタートした年から、その全てにおいて、本学の伝統的な特色のひとつである特定研究に長く携わることができたのは、幸せであり、誇らしくもある。

しかし、現在、その伝統はカリキュラムの改正等に伴い、残念ながら途絶えてしまっている。

筆者自身は、特定研究・保育総合ゼミでの演奏発表の流れを継承するために活動し、学生とともにハンドベル演奏の発表を行ってきた。京王フローラルガーデンアンジェ（調布市）でのクリスマスコンサート（2日間・4回公演）は、指導者である筆者と学生との研究成果を学外の演奏会で発表する絶好の機会であり、また、演奏後には観客に直接ベルに触れていただく交流の時間を設け、アンジェ開園の年から昨年まで11年間、地域に根ざした活動としても主催者や固定ファンからの支持を受けていた。本学での自主研究の灯を消してはならないということから、今後も別の方策で継続できるよう考えていきたい。

さて、時代は少子化、18歳人口の減少化にあって、本学も生き残りの危機感を持たざるを得なくなっている。特に近年、学生の質の変化により、教職員や卒業生が長年かけて築いてきた実績や信用を失いかねない事態が起こり始めている。本学を目指し、目的意識を持って入学した勉学意欲が高い学生の期待に答えられる環境作り、個々の学生の得意分野や興味のある分野での実力養成や未知の可能性への気づきの機会の提供などを通して、自信と誇りを備えた学生の育成や学生全体のレベルの底上げを図らなければ、明日の保育科はないのではという懸念を抱く。教員個々にとどまらず保育科全体としても問われるであろう。「駒沢らしさとは何か…」「大学の使命とは…」と。

筆者が、駒沢での教員生活も残りわずかとなったこの時期に敢えて特定研究についての提言を行う真意はここにある。かつて、教員はカリキュラムを離れて、学生と共に一つのことを追い求める熱意と使命感を持ち、学生の成長を見守りながら、学生の研究のために多くの時間や労力を傾けていた。学生のひたむきな姿や、才能を開花させる瞬間に立ち会う喜びを知っていたからである。

筆者は、学生が「自ら学び、互いに学び、共に育ちあう」授業を目指しているが、本学教育における、建学の精神を基盤とした学生の自主的研究活動である「特定研究」の意義を再確認し、再び光が与えられることを期待する。そのことにより、保育科に籍を置く教員と、そこに学ぶ学生が、「自ら学び、互いに啓発し、切磋琢磨しあえる」環境にあり、研究室での節度のある、真の大学らしい交流の姿の再現する必要があると思う。

参考引用文献

- 1) 安田淳子 (1990) 駒沢学園校友会誌 平成2年度『無憂華』第28号 特集「二十一世紀の駒沢学園の教育を展望する (3) —保育科—「自ら学ぶ意欲と姿勢—特定研究—」
- 2) 「保育研究」第4号 駒沢女子短期大学 昭和56年3月
- 3) 駒沢女子短期大学 保育科特定研究 一覧表 昭和49年度～昭和54年度
注) 一覧表(発表会プログラム)は、発表会で配布されたプリントで、特定研究委員会の資料として保存されているものである。
- 4) 駒沢女子短期大学 保育科特定研究発表会(発表要旨:筆者注) 昭和55年度～平成12年
注) 発表要旨(冊子)は、公刊はされていないが、学内の各部署の関係者にも配布されている。図書館において保管している。
- 5) 安田淳子 (2013)「特定研究」復活への提言 駒沢女子短期大学研究紀要 第46号